

現代の子どもの生活実態調査

四ツ金雅彦((公財)全日本私立幼稚園・幼稚園教育研究機構・調査広報委員会委員長)・岩立京子(東京学芸大学)
波岡伸郎((公財)全日本私立幼稚園・幼稚園教育研究機構・調査広報委員会編集委員)・前田幹((公財)全日本私立幼稚園・幼稚園教育研究機構・調査広報委員会編集委員)

急速に変化する社会のなかで、子どもを取り巻く環境も大きく変化している。少子高齢化や核家族化は、子どもの家族の構造やかかわりの在り方に影響を及ぼしきたが、政府が掲げるいわゆる「一億総活躍社会」に向かう過程で、女性が子育てをしながら、労働市場へ参入する傾向がさらに高まる可能性もある。これらの動きは、今後の家族の生活やかかわり、出産や子育て、保育の在り方にさらなる影響を与えるだろう。

本研究は、変化する社会のなかで生きる子どもの生活実態を捉えることを目的としている。子どもの生活実態調査については、ベネッセの幼児教育実態調査(2010)、NHKの子どもの生活時間調査(2013)、私立保育園連盟(2008)などが、比較的大規模な調査を行い、子どもの発達および親の子育ての意識などの経年変化を見ている。また、比較的小規模なものは多くの地方自治体で行われてきている。しかし、そこでは、幼稚園や認定こども園の子どもの生活実態の比較、親の就業と幼児の生活などの関係はみられていない。また、サンプル数の限界によりデータの信頼性、妥当性に問題がみられたりする。そこで、本調査は、過去に類を見ないサンプル数で、幼稚園、認定こども園に通う保護者にアンケートを行うことにより、子どもの生活実態の経年変化、幼稚園と子ども園に通う子どもの生活実態の比較、親の就業による子どもの生活実態の比較などをを行うことを目的とした。本研究では、全国12都道府県、34園(幼稚園24園、認定こども園10園)に子どもを通わせる、保護者およそ5300名を対象に調査を行うことを通して、子どもの生活の実態を明らかにする。

調査方法

表1 協力者(幼稚園、認定こども園に子どもを通わせる保護者)

	幼稚園		認定こども園	
	N	%	N	%
5歳児	1342	35.6	567	36.3
4歳児	1296	34.4	550	35.2
3歳児	1054	28.0	388	24.9
3歳未満	76	2.0	56	3.6
合計	3768	100.0	1561	100.0

親の年齢

幼稚園 母(平均36.6歳) 父(平均38.6歳)
認定こども園 母(平均32.0歳) 父(平均38.6歳)

期日: 平成27年10月1日～平成27年12月23日

協力者: 幼稚園: 全国から、ほぼ偏りが無いように12都道府県(北海道、秋田、栃木、埼玉、新潟、東京、富山、鳥取、滋賀、京都、福岡、佐賀)から2園ずつ、24園を選択した。認定こども園: 同様に10都道府県から1園ずつ、10園を選択した。それらの幼稚園、認定こども園に3、4、5歳と、3歳未満の子どもを通わせる保護者にアンケートへの回答依頼をした。

配布方法: 園から、直接、保護者に無名記入式、留め置き法のアンケートを配布し、記入後に直接、回収した。

アンケートの作成: 質問項目は本委員会が5年前に行った調査項目を参考に、生活実態(起床、睡眠、食事の時間)、遊びの実態(降園後、どこで、誰と、何をして遊ぶか)、習い事の実態、幼稚園・認定こども園の預かり保育、延長保育の利用実態(頻度、時間、理由)などから作成した。

結果と考察

幼稚園、認定こども園における利用実態

幼稚園と認定こども園(以下、こども園と略。)の利用実態をみると、幼稚園における預かりの実態をみると、「ほとんど利用しない」(6%)と「月1回程度」(15%)、「週に1回程度」を含めるとおよそ8割に達していた。一方で、「週4日以上」が15%みられた。利用時間も「1時間未満」「2時間」「3時間」を含めると全体の7割に及び、幼稚園におけるニーズは多様化してきているが、まだ、複数日、長時間にわたり、預かりを利用する保護者は多くない実態がみられた。(図1、2参照)この傾向に年齢差は見られなかった。こども園での延長保育については、「月1回程度」と「週1回程度」を含めると7割を超えていた。

また、「1時間未満」「1時間」「2時間」「3時間」を含めると2割に達し、こども園においても、長時間保育を希望するものは多くない実態がみられた。この傾向に年齢差はみられなかった。一方で、「週に4回程度」の利用者が25%おり、多様なニーズが読み取れた。この結果は、子ども育て支援新制度が平成27年度から施行されて間もなく、調査協力園が、幼稚園からこども園に移行したいわゆる「幼稚園由来のこども園」が多いので、長時間保育のニーズは現時点で高くないと考えられる。ちなみに、こども園全体において、1号認定は1,112人(71.0%)、2号認定は383人(24.5%)、3号認定は71人(4.5%)であった。

2010年と2015年調査の比較からみる子どもの生活の変化

前回調査は幼稚園を対象としているので、今回の調査の主に幼稚園データと比較した。

就寝時刻: 前回調査は1時間ごとに、今回の調査は30分ごとに聞いていているので、前回に合わせて1時間ごとで比較した。9時台に寝る子どもは53.6%で最も多く、次に8時台が36.3%だった。前回の調査では、8時台が最も多く(50%)、9時台(30%)が次に多く、今回のほうが就寝時刻が遅くなっている傾向がみられた。しかし、10時台に寝る子どもの比率(10%)は、前回調査(20%)の半分に減っていることが示された。(図5、6参照)

起床時刻: 今回、朝7時台に起きる子どもが54.6%、6時台に起きる子どもが41.6%であった。前回調査では、6時台に起きる子どもが54%で、7時台に起きる子どもは36%であった。この結果から、幼稚園に通う子どもの90%以上は、6時台、7時台に起きることがわかった。また、前回調査よりも、今回で、起床時間がやや遅くなる傾向がみられた。(図7、8参照)睡眠時間: 前回調査も今回の調査も、9時間～10時間未満の子どもが最も多く、次に10時間以上の子どもが多かった。前回調査と比べて、遅く寝て、遅く起きる傾向がみられたが、睡眠時間は確保されていることが示された。次に、年齢の違いを見ると、9時間から10時間未満群では年長児が多く、10時間以上寝る群のなかでは、未満児、年少児群など低年齢群が多かった。(図9参照)

帰宅時間: 帰宅時間は2時台を中心広がりがみられた。午後2時台が最も多く(61.9%)、次に3時台が多かった。こども園でも同様の結果が得られた。前回調査でも、午後3時台が最も多かったが(59.7%)、幼稚園の預かり保育の利用などにより、4時台、5時台、6時台と帰宅時刻の広がりが見られた。

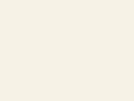
朝食の種類(パンかご飯か、副菜があるかどうか): 朝食は、前年度調査(96.5%)、今年度調査(93.7%)においても、ほとんどの子どもが毎日、食べていた。その傾向に有意な年齢差は見られなかった。食べるものは、パン(48.9%)、ごはん(48.4%)でほとんどの子どもがごはんのいすれかを食べていた。副菜については、「食べる子78.7%、食べない子が21.3%で、5人に1人の子どもが主食のみの朝食を取っていた。副菜を食べない理由については、「子どもが食べたがらない」、「朝は時間に余裕がなく作れない」順に多かった。(図10参照)

<幼稚園と認定こども園に通う子どもの生活>

今回の調査で、幼稚園と認定こども園に通う子どもの帰宅後の過ごし方から、遊び、習い事などを比較した。

帰宅後の過ごし方と遊び: 帰宅後に一緒に過ごす人は、幼稚園、子ども園ともに「母親」が最も多く、全体の5割を超え、次に「きょうだい」が多い傾向が示された。帰宅後に子どもが何をして過ごすか聞いたところ、幼稚園、こども園ともに家のなかで遊び子どもが最も多く(幼稚園75.7%、こども園81.8%)、次に外で遊び子どもが多く見られた。外遊びの内容は、三輪車や自転車などの乗り物遊び、鬼ごっこ、こっこ遊び、フランク、滑り台など、いろいろな遊びをしていることがわかった。

家のなかの遊びで最も多かったのは、「工作・折り紙・ビーズ遊び・粘土・お絵描き」などの幼児の手先を使った伝統的な遊びで、次に「テレビ、DVD、ゲーム(DS、プレステなどの携帯ゲーム、テレビゲーム)」と「ままごと・ヒーロー・ごっこ・人形遊び」などの想像遊び、ブロック・パズル・レゴ類、絵本・読書、その他の順に多く見られた。以前から、外遊びをせず、家のなかでのテレビゲームを中心の遊びに偏りがちな現代の子どもの生活が問題視されてきたが、今回の調査では、最も多かったのが、幼児の伝統的な遊びであった。この結果は、テレビやゲームなどの長時間使用が子どもの健全な発達に対して負の効果を及ぼすことがマスマディアなどを通じて周知されるようになったが、それによって、子どもの生活や遊びに関する親の意識が高まることによるのかもしれない。2013年に首都圏の0歳から就学前の子どもを対象に行われた生活時間調査(NHK放送文化研究所)によると、携帯ゲーム機は、月齢が進むにつれて自分で使う幼児が大幅に増えている。今後、降園後の過ごし方については、推移を追っていく必要があろう。

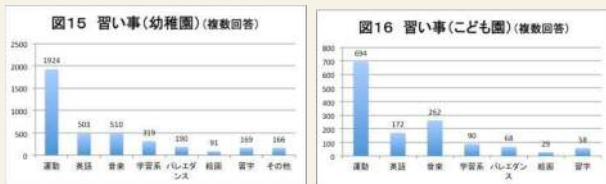


現代の子どもの生活実態調査

四ツ釜雅彦((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会委員長)・岩立京子(東京学芸大学)
波岡伸郎((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会編集委員)・前田幹((公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会編集委員)

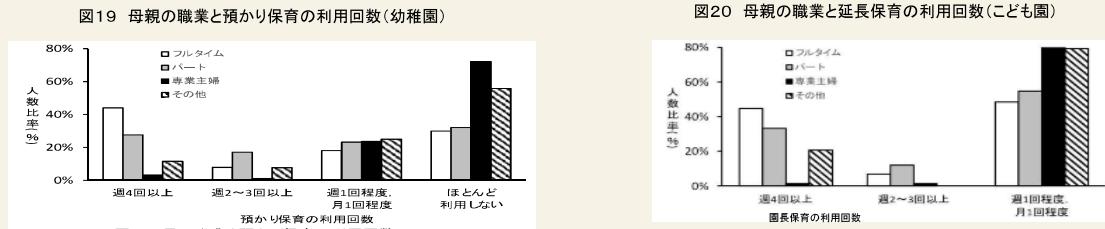
結果と考察

習い事: 習い事をしている子どもは、幼稚園で60%、こども園で56.7%で、ほとんど差はみられなかった。習い事の数は、幼稚園で平均1.6、こども園で1.7で、差はみられなかった。図15、16は習い事に関する複数回答を示したものである。最も多いのが運動系の習い事で、次にピアノなどの音楽系と英語系、学習系と多かった。都道府県別に習い事を「していない」「している」で分析したところ、幼稚園でみると、東京都、滋賀県、京都府で「している」比率が高く、秋田県、鳥取県、福岡県で「していない」比率が高かった。こども園でみると、「している」頻度が高いのは、東京都、福岡県、鳥取県で、「していない」頻度が高いのが北海道、富山県、秋田県であった。

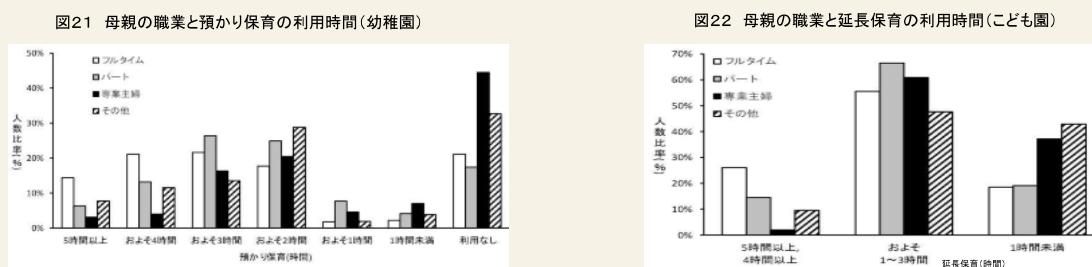


母親の職業と園の利用実態

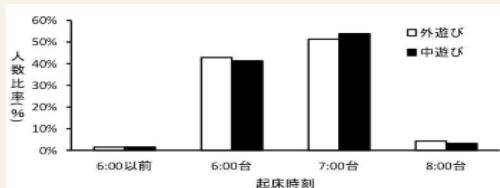
母親の仕事と預かり保育あるいは延長保育の利用回数: 母親の仕事がフルタイム、パート、専業主婦、その他で、幼稚園の預かり保育の利用回数に差があるかみたところ、フルタイムとパートタイムの場合、週に4回以上、週に2~3回以上の利用が有意に多く、専業主婦の場合、ほとんど利用しないが有意に多かった。同様に母親の職業とこども園の延長保育の利用回数との関係をみたところ、フルタイムとパートタイムの場合、週4回以上の利用が有意に多く、専業主婦の場合、週に1回程度の利用が有意に多かった。母親の仕事の仕方が、預かりや延長保育の利用に影響を与えていたことが示唆された。



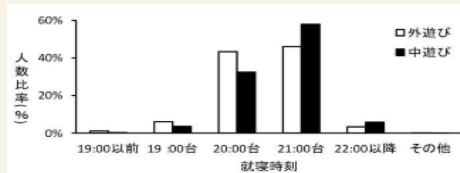
母親の仕事と預かり保育あるいは延長保育の利用回数: 幼稚園の預かり保育についてみると、フルタイムの場合、5時間以上、4時間での利用の頻度が有意に多く、パートの場合、およそ1時間~3時間の利用が有意に多く、専業主婦の場合、利用なしが多い。こども園の延長保育についてみると、フルタイム、パートタイム、専業主婦、その他のどの群も、1~3時間は頻度が高いが、母親の仕事がフルタイムの場合、特に利用時間が、4時間以上~5時間以上が有意に多く、パートの場合は1~3時間が多く、専業主婦の場合には、1時間未満が多かった。



降園後の遊び群・中遊び群と就寝時刻 (幼稚園)



降園後の外遊び群・中遊び群と就寝時刻 (こども園)



降園後の遊びと就寝時刻

降園後に家のなかで遊ぶ子どもと、外で遊ぶ子どもの就寝時刻をみたところ、幼稚園のほうは、中遊び群と外遊び群で有意な差が見られなかった。こども園のほうは、外遊び群は20時台に就寝する頻度が有意に高く、中遊び群は21時台に就寝する頻度が有意に高かった。体をつかう遊びの多い外遊びをする群が就寝時刻が早いという仮説は「こども園」の子どもについてのみ、検証された。首都圏で行われた幼児生活時間調査(NHK放送文化研究所、2013)によると、6歳児の約40%が携帯ゲーム機やテレビゲームを自ら使い、スマートフォンは2歳半でおよそ20%が使用しているという。今後、これらの遊びがより長時間になっていく可能性も考えられる。

本調査は、幼稚園、認定こども園に子どもを通わせる保護者、およそ5300名にアンケートに回答してもらうことにより、預かり保育や延長保育の利用実態などを明らかにした。幼稚園は教育課程に係る教育時間の修了後等に預かり保育を行い、認定こども園は1、2、3号に認定される子どもの多様な保育ニーズに対応する保育を行い、両者が形的には近似してきている。各園の保育時間(開所時間)や保育内容、利用実態などをより詳細に調査すること、および継続調査により、経年変化を見していくことが今後の課題となるだろう。